



ルベシの大山松

アイヌの伝説が宿る
樹齢八〇〇年のイチイの巨木

遠別町市街地から約12km離れた中央地区の民有地に、樹齢800年と推定されるイチイ（オンコ）の巨木が立っています。樹高約19m、幹の周囲は最も太いところで約3.2m、樹冠幅（枝）は南北10m、東西10.3mにまで成長した巨木で、昭和59年（1984年）には遠別町教育委員会が町の文化財として保護することを決めています。

ルベシの大山松（だいせんまつ）と命名されたこのイチイの木は、山で木を伐採する杣人（そまびと）と呼ばれた職人達が、大正時代から冬山伐採の安全祈願のために立ち寄った神木で、山の神である大山神（女神）が祭られています。ルベシとはこの地区の通称で、稲作地帯として発展した遠別川沿いの北側の地域がルベシと呼ばれていたことから、ルベシの大山松と呼ばれるようになりました。

このルベシの大山松は遠別がアイヌ語で「ウエン・ベツ」と呼ばれていた江戸後期以降の時代に一つの伝説が残されています。「ウエン・ベツ」とはウエン=悪い、ベツ=川という意味。流域の地形が変わるほどの暴れ川の河口にアイヌのコタン（集落）があり、ウエン・ベツアイヌは天塩や上川の人々との交流にウエン・ベツ上流を利用し、通称ルベシを主道としていました。ある時、蝦夷地全域で天然痘が流行し、ウエン・ベツコタンでも発病者が出たため、コタンの酋長は天塩アイヌに薬草の譲渡を請うため、若者ポロカセを使者に命じます。決死の覚悟で出発したポロカセの恋人ジュカイはルベシの丘に立つイチイの木にアツシ織の衣を吊して、恋人の無事を祈り続けました。その願いが通じ、ポロカセは薬草を持ち帰り、二人はその後、晴れて夫婦になったそうです。

見どころ

高さ20m近くまで達するルベシの大山松は、イチイならではの円錐型の樹形を保ち、どっしりとした迫力ある姿を見せてくれます。その大きさも幹の太さもまさに巨木。由緒ある木として、町のシンボリック存在となっています。

ポイント

ウエン・ベツアイヌの伝説に登場する勇敢なポロカセと健気なジュカイは、ルベシの大山松を「カムイ（神）の宿る木」として大切に守り続けたそうです。

五感で感じる！ 風土資産の魅力

聴く 触る 味わう 嗅ぐ 知る

知る

昔のきこりの大切な守り神が祀られた由緒ある木。その昔、木こりたちは冬山伐採を行う前に必ずこの木に立ち寄り、山の神である「大山神」（女の神様）に冬山造材事業の安全を祈願したとされています。

■基本情報（R7.3）

住所：天塩郡遠別町字中央545-1
問い合わせ：遠別町教育委員会
TEL：01632-7-2353